

宍道町ふるさと文庫21

乱世を生きる

# 戦国武将 宍道氏とその居城



豊龍寺開基宍道隆慶座像

## 発刊にあたって

宍道町ふるさと文庫は平成元年（1989）に「宍道湖の漁具・漁法」を発刊して以来、本書で21冊目を迎えました。平成17年（2005）3月31日より、宍道町は松江市・八東郡8市町村による合併に伴い新松江市の一員となりますので、「宍道町ふるさと文庫」としては、今回が最後となります。長い間、このシリーズの執筆に関わっていただいた先生方、シリーズを支えていただいた多くの皆さまに感謝申し上げます。

さて、本書は文部科学省委嘱事業「宍道町社会教育活性化21世紀プラン」により、全国の宍道さん・佐々布さんにご案内をし、開催した「戦国武将 宍道氏講演会」において、井上寛司先生、山根正明先生にご講演いただいたものを編集したものです。また、宍道氏ゆかりの「金山・五輪塔群」についても掲載いたしました。

中世宍道郷を中心に、戦国乱世を生き抜いた宍道氏の活躍にまつわる伝承は、金山（坂口）要害山城のある金山、坂口地区を中心に多く語り継がれてきたところですが、昭和63年（1988）には「金山要害山を語る会」が発足し、以後、地元での機運を背景に、井上寛司先生、山根正明先生には文献史料、山城等の調査・研究をとおして、戦国武将宍道氏の歴史を明らかにする活動に深く関わっていただきました。

本書の内容は、『宍道町史』に記された宍道氏関連事項の概要を分かりやすく抜粋したものとなっています。現時点で分かりうる「戦国武将宍道氏とその居城」についての到達点でもあります。中世宍道氏の歴史を明らかにする活動にご協力願うとともに、本書が地域の歴史を明らかにする活動に活用していただければ幸いです。

# 目 次

I	戦国武将宍道氏とその時代	
1	中世宍道氏の概要	1
2	留意すべきいくつかの論点	14
3	今後の検討課題－むすびにかえて－	19
II	戦国武将宍道氏とその居城	
1	縄張り調査からみる山城の構造	25
2	宍道町内の山城の特徴	28
3	鳶ヶ巣城と熊野城について	42
4	宍道氏の帰還と金山（坂口）要害山城の整備	46
III	宍道・金山五輪塔群について	
1	はじめに	50
2	五輪塔群の概要	51
3	宍道・金山五輪塔群と宍道氏	57
4	まとめにかえて	61

## I 戦国武将宍道氏とその時代

井上 寛 司

はじめに

『宍道町史』が、多くの皆様のご協力で完結しました。ぜひご覧いただき、宍道の現在、そして今後についていろいろご意見をいただければありがたいと思っています。

ここでは、私の専門である中世の宍道氏について3つの点を述べておきたいと思います。第

1は、中世宍道氏の概要で、現在までにわかっている宍道氏の大まかな歴史的特徴です。第2は、中世の宍道氏について留意すべきいくつかの論点です。第3は、今後の検討課題です。



### 1 中世宍道氏の概要

出雲国守護京極きょうごく（近江佐々木ささき）氏の一族

戦国武将として月山富田城に拠点をおき、地元にも大変重要な位置を占めた戦国大名尼子氏あまごは、もともと近江国（現在の滋賀県）の佐々木氏の出です。出雲国では鎌倉時代になって守護しゅごが赴任してきますが、その守護はいずれも近江の源氏佐々木氏でした。

鎌倉末期までの守護一族と南北朝期以降の守護一族とは系統が違いますが、同じ佐々木氏系一族です。すなわち、鎌倉期に出雲を統治したのは、後に出雲の塩冶えんやに守護所を構え、その地名をとって塩冶を名乗った佐々木氏です。塩冶氏は塩冶高貞たかさだが最後の守護で、その後、同じ佐々木氏系一族の京極きょうごく氏が出雲の守護として南北朝期以降、戦国時代まで出雲国を統治します。そして、京極しゅごだい氏の守護代として尼子氏が登場するのが15世紀に入ってからです。応仁の乱以降、守護に代わって尼子氏が事実上、守護としての権限を請負い、さらには戦国大名として発展していったわけです。

宍道氏は佐々木氏、京極氏、尼子氏などと同じ一族です。出雲国守護京極高秀たかひでの子供の秀益ひでます（八郎を称することからして八男だろうと思われる）が出雲国宍道郷しんじょうを獲得し、宍道氏を名乗ります。尼子氏の祖である高久たかひさは秀益の兄で、近江国尼子郷を与えられて尼子氏を名乗ります。そして、尼子高久の息子である持久もちひさは出雲に移住し出雲守護代となりますが、おじさんに当たる秀益が出雲にやってきて宍道氏を名乗ったということです。（図I-1）

#### 14世紀末に成立した宍道氏

さて、塩冶高貞が出雲の守護として最期を迎えた後、京極氏が出雲の守護になりますが、当初は伯耆に拠点をおく山名やまな氏と勢力を争い、なかなか落ち着きません。やっと京極氏の支配が安定するのは明德めいとくの乱（1391）以後、山名氏が一時期勢力を縮小させられた時代です。明德の乱とは、山名氏が室町将軍からにらまれて、誘いに乗って謀反を



起こしたために、逆に勢力を抑え込まれた事件です。その後、京極氏の支配が安定し、出雲国支配が確立します。そして、そのあとに尼子氏や宍道氏が出雲にやってくるということになります。宍道氏はもともと源氏佐々木を名乗っていたわけですが、宍道に所領を得てここにやって来て、地名をとって宍道氏と名乗ります。

もちろん、宍道には宍道氏が入ってくるまでの歴史があって、それ以前は成田なりた氏という、これまた武蔵国からやって来た関東武士が支配をしていました。その成田氏が南北朝の内乱の中で没落していきます。没落したあと、成田氏が持っていた所領が守護の所領として没収され、それが守護の一族である秀益に与えられ、宍道氏が誕生したわけです。歴史の上で、宍道氏が登場するのは14世紀末のことです。

#### 複数の家によって構成された宍道氏

宍道氏については、実は当初からややこしい面がありました。というのは、普通、武士は1つの家で考えるわけですが、宍道氏の場合は最初から少なくとも2つの家が同時に出雲にやってきたらしいのです。すなわち、もともと成田氏が支配していた宍道郷（宍道氏の本領）に拠点を置く宍道氏と、宍道氏の一族ではあるけれども、それとは別に独立した分家のような存在で、島根半島あたりに所領を持っていた宍道氏の2つの家が最初からあったのではないかと推測されるからです。そして、本家方を「八郎家」、分家方を「九郎家」と呼んでいたようです。この八郎家と九郎家の関係がわかってくるのは、尼子経久時代の史料からで、宍道氏は複数の家の集合体という形で出雲に拠点

をおいたと考えられます。

島根半島の方に拠点をおいたのは庶子系で、現在の島根町の加賀から松江市の西持田あたりにかけて（加賀荘の一部）所領を持っていました。それが史料上、最初に出てくる宍道氏です。宍道に拠点を置く宍道氏の分家筋の一族で、どういう形かはわかりませんが、やはり京極氏から所領をもらって加賀荘あたりに拠点を構えたものと思われま

す。

系図によると、宍道氏の初代は秀益、その次が慶秀、慶景と三代が書いてありますが、実は秀益という人物は系図以外の史料では確認できません。慶秀、慶景も系図以外の史料では確認できません。つまり、宍道氏の系図はよくわからないのが現状なのです。宍道氏の初代が本当に秀益かどうかも史料的には確認できませんし、島根半島に所領を得た分家筋の宍道氏は誰なのか名前もわかっていません。八郎家とか九郎家と名乗ってはいますが、実名はわからないということです。

### 15世紀中頃に宍道・来海<sup>きまち</sup>支配体制が成立

宍道氏初代から一、二代を経た後の15世紀中頃、つまり尼子氏が持久の頃から次第に出雲で活躍し始める時代で、まだ清貞<sup>きよさだ</sup>が家督を相続する以前のようですが、その頃に宍道氏は室町将軍の直参<sup>じきさん</sup>（外様衆）に任ぜられます。つまり、将軍直属の武士としての身分を獲得するわけです。

将軍直属の武士だということもあって、「来海<sup>きまちのしょう</sup>荘」（現在の来待）という荘園の代官に命じられます。来海荘はもともと天皇家の所領で、

時代が推移する中で天皇家が次第に力を失い、やがて室町幕府將軍の直轄領になったという経緯があります。宍道氏が將軍の直参になったこともあって、將軍の直轄領となったこの来海莊の代官に宍道氏が命じられ、宍道と来海の両方を支配する宍道氏という、今日私たちが耳にする宍道氏の姿が生まれたわけです。宍道氏は出雲国において確固たる地位を築いたわけですが、先述のように、この時期もその実態はよくわかりません。史料上、そう推定できるということです。

### 特異な地位から生じた尼子との矛盾・対立

やがて、出雲国では尼子<sup>つねひさ</sup>経久の時代を迎えます。この経久の時代頃から、次第に宍道氏関係の史料は多くなり、その姿がわかるようになります。尼子<sup>おうにん</sup>経久の父清貞は応仁の乱を鎮める功績を認められて、守護代から、やがて自立した守護<sup>せんごくだいみょう</sup>権力そのものを引き継ぐ戦国大名として自立していきます。そして、経久の時代に、尼子氏の戦国大名としての姿が明確になります。

経久の家臣団は、大きく3つに分かれます。1つは、尼子氏の最も中心的な武力を形づくる「富田衆<sup>とだしゅう</sup>」です。これは戦国大名尼子氏直属の武士で、まさに経久の手足になって動く最も強力な武士団です。もう1つは、新宮党<sup>しんぐうとう</sup>などの「尼子一族」です。そして、もう一つは、もともと出雲国にいた伝統的な在地の領主である「国衆<sup>くにしゅう</sup>」です。佐々布氏やかつての成田氏などが国衆で、出雲国内にある中世的な所領（莊園や郷）の領主として権力を持ってきた地付きの領主です。国衆が量的には最も多いのですが、守護はそれを公の立場から管轄することに

なります。富田衆、尼子一族、国衆、この三つが尼子氏の家臣団の機軸をなすわけです。

ところが尼子の場合、もともと守護代から始まったという経緯も関係するのだと思いますが、他の戦国大名とはちょっと違う家臣団の構造を持っていました。すなわち、尼子一族とは一線を画す、「御一族衆ごいちぞくしゅう」というもう1つのランクです。直属の家臣、戦国大名の一族、そして国人という3つのタイプは、普通どこにも共通するのですが、尼子氏の場合は、尼子一族とは違う、そして国人とも区別された「御一族衆」があって、宍道氏はそこに入るわけです。御一族衆というのは、尼子経久や、その父清貞からするとおじいさんなどに当たるランクで、尼子の権力を支える広い意味での一族、親戚です。宍道氏はいわば尼子の縁続きのような存在として位置づけられているわけです。

そういうわけで、宍道氏は尼子一族ではないけれども、尼子一族を支える位置を占めていました。したがって、尼子氏にとっては当初から一目置く存在であったということになります。そういう点では、宍道氏は戦国大名尼子氏との関係において特異な地位を占めていたわけです。

また、宍道という場所は、中世以来、陸上交通、水上交通の拠点でした。東部から奥出雲に抜ける陸路の分岐点であり、また海路では宍道湖をはさんで日本海とつながるといふ水陸の交通の要衝であって、軍事上も大変重要な位置を占めていました。そういう物資流通、情報伝達、軍事的拠点という面で大変大事な位置を占めている宍道・来海

に、宍道氏は拠点を置いたということです。しかもそれが尼子氏の御一族です。宍道氏の占める位置は、戦国期においては全く独自のものであったと言えるわけです。

応仁の乱が始まったとき、尼子清貞は尼子氏に反旗を翻す一揆を抑えて出雲国を統一しますが、その過程で宍道九郎なるものが反尼子の頭目として尼子氏を無視して動き、近江にいる守護の京極氏が、「けしからん。宍道を討て」と清貞に命じたという史料が残っています。宍道氏は一面では尼子氏を支え、その反面では反尼子氏の頭目にもなり得る位置を占めていたわけです。そういう微妙で重要な位置を占めていたのが宍道氏です。

### 反尼子の大内につき周防に撤退

尼子氏は、経久段階で奥出雲を含め、戦国大名としての支配を確立しますが、息子の政久が死に、孫の晴久はるひさに家督を継ぐこととなります。尼子氏にとって、晴久の時代は経久段階で確立された出雲国支配を完成させた時代で、より強力に尼子氏を中心にして支配を組み替えていく段階になります。すると、経久段階のような緩やかな支配ではなく、戦国大名の権力を象徴する、より強力な支配体制にとって、宍道氏のような存在は大変都合が悪いのです。そこで宍道氏との間の溝が次第に深まってくることにより、次のような動きが出てきます。

すなわち、経久から晴久へと家督を譲られるのは天文9年（1540）ですが、この年に尼子氏は毛利氏もうりを攻めました。安芸吉田攻めです。しかし、尼子氏は逆にやられて、這々の体ほうほうで逃げ帰ってきます。経久

は晴久に家督相続をしましたが、孫はまだ若いということで後見人の立場にありました。その経久の制止を振り切った晴久による毛利攻めでした。そして間もなく、出雲支配の要であった経久が亡くなります。一方、尼子氏をうち負かしたことによって、毛利氏は一挙に力を持つようになり、政治的力関係は大きく変化します。

経久の死と毛利氏の台頭という、尼子氏にとっての危機的状況の中で、尼子氏は大きな転期を迎えます。と同時に、権力内部では経久から晴久へと権力を移行させていくために、構造を組み替える必要があり、いろいろなことが重なった時期でした。

その中で、宍道氏の立場が微妙に変化し始め、やがて尼子氏と宍道氏との矛盾が広がっていきます。折しも、天文11年（1542）、毛利氏を含めて大内氏おおうちが月山富田城がっさんとだじょうを攻めます。このとき尼子氏と宍道氏との矛盾が公然と表面化して、宍道氏は最初から大内方につく反尼子方として、月山富田城攻めに参加するわけです。

このときには、宍道氏だけでなく出雲のいくつかの有力者が大内氏に協力しますが、尼子方の守りは堅く、大内方は破れます。翌年の大内氏撤退の際、一時大内氏に従った武士たちの多くは元どおりに尼子氏に戻りますが、宍道氏は戻らずに、そのまま大内氏についていきます。それほど尼子氏とは復縁できない状況に宍道氏は陥っていたわけです。

#### 毛利方として再び出雲へ

こうして宍道氏は、大内氏に従い周防に転居していきます。大内氏

が滅んだあと、毛利が周防、長門、備後、安芸を治め、やがて永禄5年（1562）に石見から出雲へと攻め上ってきます。そのとき宍道氏は、毛利方の一武将として出雲へ攻め込んでくることになります。ただ、注意しなくてはいけない点は、先ほど述べたように、宍道氏はいくつかの家に別れているという点です。当初は2つ、そして、その後さらにいくつかの家に分かれていきますが、全部の宍道氏が大内方について行ったわけではなく、ついていったのは宍道氏の本家筋である惣領<sup>そうりょう</sup>家の宍道久慶<sup>ひさよし</sup>だけです。

実は、久慶<sup>ひさよし</sup>というのは隆慶<sup>たかよし</sup>の古い名前です。当時、武士たちは主人から名前の一字をもらうのが一般的で、主人の側も自分に対する忠誠を強化するために、名前を与えて取り込むことをしきりに行いました。久慶のもともとの名前はわかりませんが、尼子経久の「久」の字をもらって名乗ったものです。しかも経久の娘ももらっています。尼子氏にとって、娘をやり、名前も自分の字を与えるほど、宍道氏は大変重要な存在だったわけです。これが経久の段階です。

ところが晴久の段階になると、両氏の間溝が広がってきて、宍道氏は尼子を離れて大内に従います。そして、大内が滅んだあと、毛利に従って出雲に帰ってくると、今度は隆慶<sup>たかよし</sup>と名乗ります。「隆」という字は大内義隆<sup>よしたか</sup>の「隆」です。つまり、同じ人間が天文11年の大内氏の尼子攻め、そして翌年天文12年の撤退までは宍道久慶と名乗っていましたが、大内に従っていったあとは、宍道隆慶と名乗り、立場が変わっています。宍道氏の歴史は、同じ人物の名前が久慶から隆慶へと

変わることに表れているように、尼子側から反尼子側＝大内・毛利方へと切り替わっているわけです。

永禄5年（1562）には、宍道隆慶、つまりもとの久慶が毛利方として出雲に攻め込んできます。宍道氏が出雲を退去したあと、金山（坂口）要害山城などは、一時尼子方に没収されていますが、宍道氏の分家筋、五郎家だとか六郎家などは全部出雲に残っていて、ずっと尼子方の武士として暮らしていたわけです。確たる証拠はありませんが、おそらくその一部は金山（坂口）要害山城周辺にもいただろうと推察されます。

やがて宍道隆慶らの惣領家が復帰すると、毛利氏は惣領家に本領を安堵し、来海、宍道などを再度与えます。そして金山（坂口）要害山城も復帰することになります。白石（<sup>はくいし</sup>宍道町白石地域）なども久慶が退去したあと没収されましたが、それが再び惣領家に与えられたようです。このように、尼子氏時代のものを全部否定して、再び元の宍道氏の本家筋に城を与え直し、城も復帰させるようにしたわけです。

### 16世紀後半、隆慶、政慶時代に最盛期

宍道氏は毛利氏の一軍として出雲に入ってきて、斐伊川筋の<sup>とびがす</sup>鳶ヶ巢城で2年間城将として守りを命ぜられます。そして、そののち宍道へ帰ってきます。つまり、永禄5年に出雲に入ってきて、ただちに宍道に帰ったわけではなく、そこには時間的な空白があったということです。というのは、尼子方として残った宍道氏が依然いて、そこへ毛利方についた本家が帰ってきたわけですから、当然、内部は分裂し、激

しい対立が起こったと考えられます。結局、最後は本家筋である隆慶が押さえて、そこで宍道氏は初めて1つに統一されます。それが永禄6～7年あたりだろうと思われます。新しい宍道氏の支配体制の誕生です。

したがって、それまでとはかなり様子の違う宍道氏の地域支配が行われました。復帰後の隆慶、そしてその息子である政慶、この2人の時代が、宍道氏が最盛期を迎えた時代です。金山（坂口）要害山城が今日あるように、巨大な整備された城として完成するのはこの時代、すなわち永禄5年以降です。しかも毛利軍の軍事的拠点としてです。尼子方が月山富田城からしきりに宍道に向かって攻めてきます。宍道周辺を死守する非常に重要な拠点でした。

一方、宍道氏惣領家による地域支配体制が整備されます。つまり、主人である宍道隆慶、政慶を中心にピラミッド型の強力な一族支配、あるいは家臣団支配が行われます。かつてのように、いくつかの家が分立するのではなく、主人の命令ですべてが律せられ1つにまとまる、強力な「家中支配体制」<sup>かちゅうしはいたいせい</sup>ができあがってきます。また、主人の命を奉じて、支配体制を維持する機構として、「奉行人制」<sup>ぶぎょうにんせい</sup>もできました。

そういう強力な支配体制を踏まえて、これまでの宍道、来海だけではなく、佐々布、伊志見<sup>いじみ</sup>まで含めた今日の宍道町域全体を、宍道氏の支配地として組み込みます。今日の宍道町の領域は、戦国期に宍道隆慶がつくりあげた宍道氏の支配領域と重なります。

さらに、宍道氏はこの宍道町域にとどまらず、対岸の、今日でいう

松江市大野町、秋鹿町あいかあたりから出雲市にかけて、あるいは大原郡にかけての周辺部に所領をかなり確保して、そこに一族を配置し、広域的な支配権力を構築します。その要としての位置も金山（坂口）要害山城は占めています。つまり、金山（坂口）要害山城は、現在の宍道町域全体に及ぶ領域支配の拠点であると同時に、かなり広い領域の支配をにらんだ軍事拠点としても機能する位置を占めたのだらうと思われれます。

このように、宍道氏の歴史は、宍道久慶から隆慶に変わる前後の段階で大きく様変わりします。

#### 長門への転封（天正19年）で、幕を閉じる

こうして宍道氏は最隆盛期を迎えるわけですが、やがて中国全域を治めた毛利氏が、織田信長おだのぶなが、豊臣秀吉とよとみひでよしの全国制覇の動きと対決します。毛利氏は鳥取城を落とされ、やがて天正10年（1582）に秀吉と和睦を結びます。秀吉は、本能寺で信長が死んだことを隠したまま毛利氏と和睦を結び、すぐさま明智光秀あけちみつひでの討伐にとって返しますが、そのときの協定で鳥取の八橋やばせから西側が毛利氏の所領となり、かなり領土が縮小されることとなります。以降、毛利氏は豊臣大名の一人というように次第に勢力を縮小させられていくわけです。とくに天正20年（1592、文禄元年）の朝鮮出兵に向けて、豊臣氏の全国支配が次第に整って行く中で、毛利氏の支配は次第に追い詰められていきます。そこで、毛利氏も家臣団の再編成をしないといけないということで、検地を実施し、所領のあてがいを行って家臣団の転封を行うこととなります。

天正19年（1591）、その一環としてこの宍道氏の所領も没収され、宍道氏は長門国の阿武郡あぶぐんに転封になります。時期は天正19年の3月から11月の間だろうと推定されています。こうして隆盛を誇った宍道氏も、その本拠地であった宍道での歴史に幕を閉じることになるわけです。

## 2 留意すべきいくつかの論点

『宍道町史』で宍道氏の概要が初めて明らかに

最後に、重複する部分もありますが、宍道氏について留意すべきいくつかの論点について述べたいと思います。

「中世宍道氏の概要」で述べたことは、『宍道町史』（史料編・通史編上）に詳しく書かれていますので、是非ご参考にしてください。かつての『宍道町誌』、旧『島根県史』、あるいは『新修島根県史』には宍道氏の話はほとんど出てきません。出てくるのは大部分が軍記もので、『陰徳太平記』などに出てくる宍道氏像です。しかも、その宍道氏像はきわめて曖昧なものです。そこで、宍道氏に関わる可能な範囲の史料を集め直し、再構成してまとめたものが、今回『宍道町史』に書かれているものです。そういう意味で、『宍道町史』で初めて宍道氏の成立から天正19年の終わりにいたるまでの歴史の概要がわかってきたと言うことができます。

### 複数の家の集合体としての宍道氏

いろいろ問題を抱えながらも宍道氏について、一定のことがわかってきた現段階で、改めて宍道氏がどういう意味で注目されるのかを考

えてみましょう。留意すべき第1点目は、宍道氏が1つではなく、当初から「八郎（家）」、「九郎（家）」というように複数の家で成り立っていたと思われることです。後には「五郎（家）」と「六郎（家）」も出てきます。どのような関係になっているかはよくわからないのですが、八郎家や九郎家からさらに分家をしたのだらうと思います。

これまで宍道氏の系図は5つほどわかっているのですが、それらはバラバラのまったく違う系図です。これは、宍道氏そのものが、もともと大変複雑だということ、つまり同じ一族、同じ宍道氏といっても、いろいろ分家があります。しかも、それぞれの子孫の家が自分の家系図をつくります。そうすると、祖先の名前も違うなど、まったく違う系図になってきます。そういうわけで、系図が出てくれば出てくるほど、わからなくなってくるのが実態です。

いずれにしても、少なくとも最初から宍道氏なるものは1つの家ではなくて複数の家として出発しました。しかもそれがいくつかに分かれながら宍道氏として存在したと考えないと、いろいろな史料が矛盾してしまいます。宍道隆慶が毛利氏とともに帰ってきて、新しい支配体制をつくりあげるまでは、たくさんの宍道氏が分立している状況で、宍道氏を構成していました。それが隆慶によって1つの宍道氏になったということです。

宍道氏が複数の家で成り立っていたことは、特に対守護、あるいは対戦国大名という関係において見ることができます。例えば尼子経久の家臣団の一族衆として、八郎家宍道氏と九郎家宍道氏とが2つに分

けて書いてあります。同じ宍道氏ですが、それぞれ別の独立した家臣として見なされているということです。応仁・文明おうにん ぶんめいの乱の際に、反尼子連合の頭目として立ち上がった宍道九郎は、島根半島に拠点を定めていた宍道庶子家のことと推定されます。宍道氏惣領家とそれ以外の庶子家とがかなり対等な関係をもって戦国大名によって掌握されていたというのが、尼子氏時代までの状況です。

### 大きな勢力誇り、別格の位置占める

留意すべき第2点目は、宍道氏は、宍道や来海の荘園を支配する領主という点では、佐々布氏などの「国人」と共通する面もありますが、別格の位置を占めていたということです。尼子氏との関係では「御一族衆」であり、他の一般国人とは区別した形で掌握されていました。それから、相互に関連することだと思っただけですが、幕府との関係でも室町将軍の家臣、直参じきさんとしてとりたてられています。これは一般の武士にはありません。室町将軍から直接とりたてられるのは守護、もしくはそれに準ずる力を持つものだけです。石見でいうと益田氏だけが将軍の直属の家臣としてつかまえられていたわけですから、益田氏と並ぶような位置を宍道氏は占めていたということになります。

宍道氏は、守護に対しても、あるいは戦国大名に対しても、若干肩肘を張るような面があり、中央との関係においてもそういう面があります。宍道氏は中央と独自のパイプを持っていました。例えば『蔭涼軒日録』という記録によると、宍道秀藤ひでふじという宍道氏当主がおり、その兄は将軍足利義政あしかがよしまさの覚えめでたい、僧春陽景果しゅんようけいこうであったと書かれて

います。春陽は、禅宗の拠点である京都相国寺しょうこくじの住職で、漢詩をつくらせると天下一流、書も堪能ということで、京都で有名な三人の人物のうちの一人に数えられるような人物でした。弟である宍道秀藤は何度も記録に出てくる15世紀末期頃の宍道氏の当主ですが、系図にはまったく出てこない人物です。系図がそういうことを忘れてしまったということであって、この人物が実在したことは間違いありません。

藤岡大拙先生が書かれていることですが、春陽は何度も出雲あんこくの安国寺じに帰っていて、京都との間を往復しています。帰ってきては地元で文化講演会のようなものややって、お坊さんたちを集めては教える。再三、京都と出雲を往復して、京都の文化を地元へ伝え、地元の文化をまた京都にもっていくという、太いパイプをつくっていたわけです。そういう人物が将軍と大変近い関係にありました。おそらく僧春陽景杲がそういう地位に就いたのは、宍道氏が早くから将軍の家臣として都と太いパイプを持っており、そのようなつながりから春陽は都に修行に出て、能力もあつたのでしょう、相当の地位を得たのだらうと推測されます。そして、春陽の活躍などをおして、宍道氏は一層将軍にとって覚えめでたい存在になっていったと思われます。実際、盆暮れには宍道湖で獲れた鳥や魚を将軍に送ったりもしています。宍道氏には、他の一般武士とは違う都との太いパイプがあつたのです。

宍道氏は尼子に準ずるような、戦国大名に準ずるような位置を占めており、その宍道氏の特殊な位置が、戦国大名尼子氏に対しても、自立性をもっていたわけです。しかし、尼子氏が晴久段階で権力を全部

戦国大名尼子氏に吸収しようとする、尼子氏にとって宍道氏は都合の悪い存在となり、宍道氏にとってもそれは困るという矛盾が生じ、結局、宍道氏が出雲を出ざるを得ない状況に行き着いたのだらうと思われまゝ。したがって、単に「宍道氏は反尼子で反旗をひるがえしたので、忠臣ではない」、というような次元の話ではなく、もっと構造的な根の深いところに問題があったということです。

### 宍道惣領家そうりょうけと庶子家しよしけを峻別して捉える

留意すべき第3点目は、宍道惣領家（本家筋）は庶子家（分家筋）と峻別して捉える必要があるという点です。宍道氏惣領家が出雲を退去していくのは、単に尼子が好きだとか嫌いだとかいうことではなくて、歴史が大きく変化をしていく時代、戦国大名の政治構造全体が転換し、尼子氏自体の政治構造も転換していく、いわばそのきしみ合いの中で、そういう道を選ばざるを得なかったということです。しかし、それはいくつかの系統からなる宍道氏全体から見ると、宍道氏の惣領家、すなわち国人としての宍道氏ではなく、まさに尼子氏と姻戚関係を持つ、あるいは中央との太いパイプを持っている惣領家のみが出雲退去という形になって表れたのでした。

やがて、宍道氏惣領家が毛利方の一翼として帰ってくると、尼子氏の支配が再編成され、戦国大名毛利氏の支配が浸透する中で、逆に宍道氏が毛利方にとっては大変重要な位置を占めることとなります。そして、宍道氏を中心にして、出雲の国人層が統治されていくことになります。

例えば、今の松江市大野町<sup>おおの</sup>に大野氏がいました。大野氏はもともと尼子方ですが、何度か揺れ、最終的には宍道氏の家臣として組み込まれていきます。これも、毛利氏が宍道氏を使って宍道湖周辺を押さえるという方針があって、大野氏はいわば毛利の命に従って宍道の家臣に組み込まれていったということです。伝承などで宍道氏が大野氏をだまし討ちをして城を取ったとか滅ぼしたとかいう話がありますが、そういう次元の話ではなくて、もっと大きな枠組みの話だということです。

いずれにしても、歴史が大きく転換していく中で、宍道氏のあり方も転換していくわけですが、その構造は尼子的な秩序から毛利的な秩序に再編成されるというもので、宍道氏の惣領家が出雲支配の中心的な位置を占めるものとして、改めて重視されていきます。その軍事的・政治的拠点が金山（坂口）要害山城であったということになります。宍道久慶から宍道隆慶への名前の変化は、大きな歴史の転換を示すものです。以上の点に宍道氏の持つ特徴、あるいは重要性があるように思います。

### 3 今後の検討課題—むすびにかえて—

これまでの調査研究でわかった範囲のことを述べたのですが、私自身こうだろうと推測はしていても、本当にそうかと言われると、証拠を示しきれないところもたくさんあります。点々と存在する史料をつなぎあわせており、核心をつかれると答えようがないものもあり、ま

だまだわかったとは言えないというのが現在の研究の到達点です。そういう点で、今後残された課題がいくつかあります。

### さらなる宍道氏の史料の調査・収集の必要性

課題の第1は、改めて宍道氏についてもっと勉強しなければいけないということです。そのためには、宍道氏に関係する史料をもっときちんと収集し、整理し直す必要があります。『宍道町史』をつくる過程で史料集も出し、今までに比べると多くの史料が集まっています。その上で、今後の調査対象として次の3つが考えられます。私どもとしては、ぜひ皆さんのご協力を得ながら進めていきたいと思っています。

1点目は、宍道氏の家系図ができていないことです。系図（図I-1）にある秀益、慶秀、慶景というのは、実は尼子氏の家系図にみられるものです。一方、宍道氏の家系図なるものは、先ほど述べたようにいくつかありますが、それぞれ違って一貫性がありません。しかも、家系図としてもいろいろ問題があります。これまで述べたように、宍道氏はいくつかの家によって成り立っています。しかも宍道氏が天正19年に長門に移り住んだ後の歴史を見ても、実に多様です。もちろん一部は毛利の家臣として萩についていきます。しかし、地元に残った宍道氏もいるはずです。それから、転居する段階でどこかに離散していった宍道氏もあって、そこでさらにいくつかに分かれたことでしょう。中世末か近世への移行の中でさらに分かれて、それぞれが宍道氏と名乗りながら家系図を持ったはずです。したがって、実に多

様な家系図が存在したと思います。

全国の電話帳で調べると、宍道さんというお宅は百軒以上あるようですが、もし系図があればぜひとも見せていただきたいと思います。たくさん系図を集めて、まずその系図をきちんとする。それが宍道氏を確定するために不可欠な作業です。もちろん系図だけではなくて宍道氏に関わるような文書も含めて、宍道氏のご子孫、あるいはその縁者の皆さんのお宅にありましたら、ぜひとも教えていただきたいと思います。まずそのことをお願いしたいというのが1点目です。

2点目に、宍道氏に関する史料は本当に断片的です。宍道文書というのが残っていますが、これは宍道系のお宅に残された文書で、そのほとんどは出雲に関係ない京都などの地域の文書です。出雲の宍道地域に関わる文書はほとんどまとまっておらず、バラバラです。これまでの調査研究はそういう断片的な記録や文書を寄せ集めただけなので、不十分です。未活字文書とか、諸記録の中で丁寧に調べると、まだまだ出てくる可能性はあります。そういう作業は時間をかけて丹念にやらなくてははいけません。もし史料集に載っている以外で気付かれたものがあれば、ぜひとも教えていただきたいと思います。これが2点目です。

3点目に、宍道氏に関する記録は、地元でもまだまだ出る可能性があります。特に多いのは神社の棟札などです。これは『宍道町史』(史料編)に載せましたが、『雲陽誌』<sup>うんようし</sup>に載っているもの以外に棟札などにも宍道氏が建てたとか修復した等々を含めて、多様な形で検出す

することも可能だろうと思います。あらゆる機会をとらえて宍道氏に関係する史料を集めきる作業をしなければいけません。これは本当に気の遠くなるような作業になりますので、相当時間をかけないとできません。しかし、それをやらないと宍道氏のことは本当にはわかりません。今の段階は第1段階というところで、今後課題が残されています。

### 早く宍道氏の系図確定を

課題の第2は、宍道氏は本家と分家が分かれていることも含め、大変にややこしいということです。どういう家がつながるのか、記録上に宍道氏のいろいろな名前が出てきますが、どう関係しているのかなかなくまぐ合いません。そういう意味で、宍道の本家筋の隆慶、政慶に至る系図だけでなく、他の家系図も含めて、宍道氏の一族の系図をできるだけ早く確定することが求められます。確定までいなくても、もう少しきちんとしたものにしていくことができれば、もっと理解も正確になってくるだろうと思います。これはなかなか大変なことですが、今後に残された大きな課題です。ぜひともご協力いただきながらそういう作業を進めていきたいと思っています。

今日、祖先探しが大変盛んで、全国に「〇〇の会」と名前を付けて家単位で全国的な会合がつくられることがあります。宍道を名乗る皆さんでそういう会合でも持たれましたら、共通の祖先探しになると思いますので、そういう場を通じてぜひともご協力いただくようお願いいたします。

### 文書以外の資料の調査・収集を

課題の第3です。いま1つ重要なのは、文献史料だけでなく遺跡・遺物・伝承・地名伝承などに中世宍道氏はその姿を残しているはずで、そういう文書以外の多様な形の宍道氏のあり方もまた重要な要素ですので、そういうものを調査・収集して、整理しながら宍道氏の歴史、実態の輪郭をつくりあげていくことが必要だと思えます。

### 『宍道町史』は出発点

いずれにしても、以前に比べたら宍道氏のことわかってきたという段階ですが、本当はどうかというと、わかっていなというのも一面の真理であると言わざるを得ないのが研究の現状です。『宍道町史』（史料編）でもお示したように、宍道氏に関して数百点に及ぶ資料が出てきたことは大きな前進ですが、本来あるべき課題からするとまだ一部であり、初歩的な段階です。そういう点で調査・研究へのさらなるご協力をお願いしたいと思います。

今回は触れませんでした、国人の佐々布氏についてもあまり史料が残っていません。平安、鎌倉以来、点々とありますが、それも断片的です。最後は宍道氏の家臣として組み込まれて奉行人の1人を形づくることになりますが、佐々布氏には系図もまったく残っていません。佐々布氏はもともと有力な国人であり、守護代として広島まで出かけるなど、広域的に活躍していますが、その実態についてもまだまだわからないことが多いわけです。佐々布氏についても今後に残された課題だと思えます。

『宍道町史』が刊行されましたが、これは出発点であり、これから皆さんと勉強していく土台がつけられた段階です。そうは言ってもこれだけのものを出すにはそれなりの蓄積が必要でしたから、今日この段階まで到達したことは大変重要なことです。その成果を確認し合うとともに、併せて多くの皆さんのご協力の中で課題を解明していくように努力をしていきたいと考えています。

(大阪工業大学教授・宍道町史執筆委員長)

## Ⅱ 戦国武将宍道氏とその居城

山根正明

はじめに

『宍道町史』（通史編上巻）の「第3章宍道町の中世 第4節宍道地域の城館と道・村」の執筆を担当させていただきましたが、ここでは宍道町内外の山城を対比しながら宍道氏の山城の特徴について考えてみたいと思います。



### 1 <sup>なわば</sup>縄張り調査からみる<sup>やまじろ</sup>山城の構造

#### 山城の種類

私たちが山城調査でとる方法は、<sup>なわば</sup>縄張り調査という方法です。これは現地をくまなく歩き回って精密に観察して、それを縄張り図という図面に落とします。そして、それを比較対照することによってその城館の特徴を明らかにし、さらにその地域の歴史の一端を明らかにしていくという方法です。したがって、やや特殊な用語も使いますので、まず用語の解説をさせていただきます。

宍道氏の<sup>かなやま</sup>金山（<sup>さかぐち</sup>坂口）<sup>ようがいさんじょう</sup>要害山城などのような、戦国大名や国人の領国（領域）支配の中心となる城を「<sup>ほんじろ</sup>本城」あるいは「<sup>ねじろ</sup>根城」といって

います。そして、それを中心にいろいろな「支城」のネットワークをつくりまします。例えば、敵対する他の戦国大名や対立する国人との間の境目につくられた「境目の城」、あるいはそうした重要な境目の城との間の「繋ぎの城」などで、有力な戦国大名はそういう支城網をつくるのが一般的です。それから、支城の一種ともなりますが、「水軍城」(海城とも)があります。船の停泊に都合のいい入り江などに面して造られる城です。後ほど述べる宍道要害山城は、これに当たるとみています。

さらに、いざ戦争となると、臨時に「陣城」を造ります。これは非常にたくさんあります。城攻めにあたって攻撃側が足がかりとして造る陣城の場合は、「向城」とか「付城」「対城」と呼びまします。

### 山城を構成するパーツ

さらに、城を構成するいろいろな部分の呼び方を説明しておきましょう。まず「郭」があります。「カク」と音読みしたり「くるわ」と呼んだりしますが、基本的に山城、あるいは近世の城もいずれも郭をもって構成されています。中世の城はいずれも土づくりの城なので、傾斜面を削った土を低い部分に盛り上げ、それによって周囲から侵入しにくい平場を造っていきます。平場の縁の法面は急傾斜にして、上りにくくします。そういう平場が郭です。法面は「切岸」と呼びまします。

「掘切」は尾根つたいの攻撃を防ぐために、尾根筋に直角に掘った空堀のことをいいます。この掘切の中央部を削り残して通路を造ると、それは「土橋」と呼ばれます。また、攻撃側が斜面を自由に移動して

攻め上るのを妨害するために、等高線に対して垂直に山腹なりに掘っていくような空堀もあり、これは「たてほり堅堀」と呼んでいます。掘切、堅堀ともに水をたたえることのない空堀であることは言うまでもありません。

それから、郭の周囲とか要所に土をつき固めたり、あるいは削り残したりして障壁を造ることがあります。これを「どるい土塁」と呼んでいます。土塁には、土を叩きしめて盛り上げた造り方と、斜面を削り残して造った土塁があります。

城全体の出入口、あるいは城の中の郭のそれぞれの郭の出入口は、攻めるにもあるいは撃って出るにも重要なところで、これを「こぐち虎口」と呼んでいます。土塁などで囲って四角くした虎口のことは「ますがたこぐち櫓形虎口」と呼びます。

それから、きんせいじょうかく近世城郭のてんしゆ天守にあたる部分、その前身ともいべきものが「やぐら櫓」で、「やぐらだい櫓台」が設けられる場合もあります。この役割としては、戦況に応じて指示を出す戦闘指揮所とでもいべきものです。櫓台は、郭の中の中心的存在である「しゆかく主郭」に一段高くして設けられることが一般的です。

「よこやり横槍を入れる」という言葉が普段使われますが、虎口あるいは土塁などに接近した敵兵を横合いから弓とか鉄砲で射かけて攻撃する攻撃の仕方、あるいはそのための施設（郭を張り出したり、土塁を屈曲させたりする）を「よこや横矢」と呼んでいます。

以上のような大きなパーツと小さなパーツとを組み合わせ、山城

は構成されています。

さて、山城を造る場合には、その城にどういう機能を持たせるかということを考えて、その機能に応じて適切な場所を選びとります。これを「地取り」と呼びます。その上で、先ほどの大小のパーツを組み合わせます。このような城館の平面構造を「縄張り」と呼びますが、配置設計することも「縄張り」と呼んでいます。

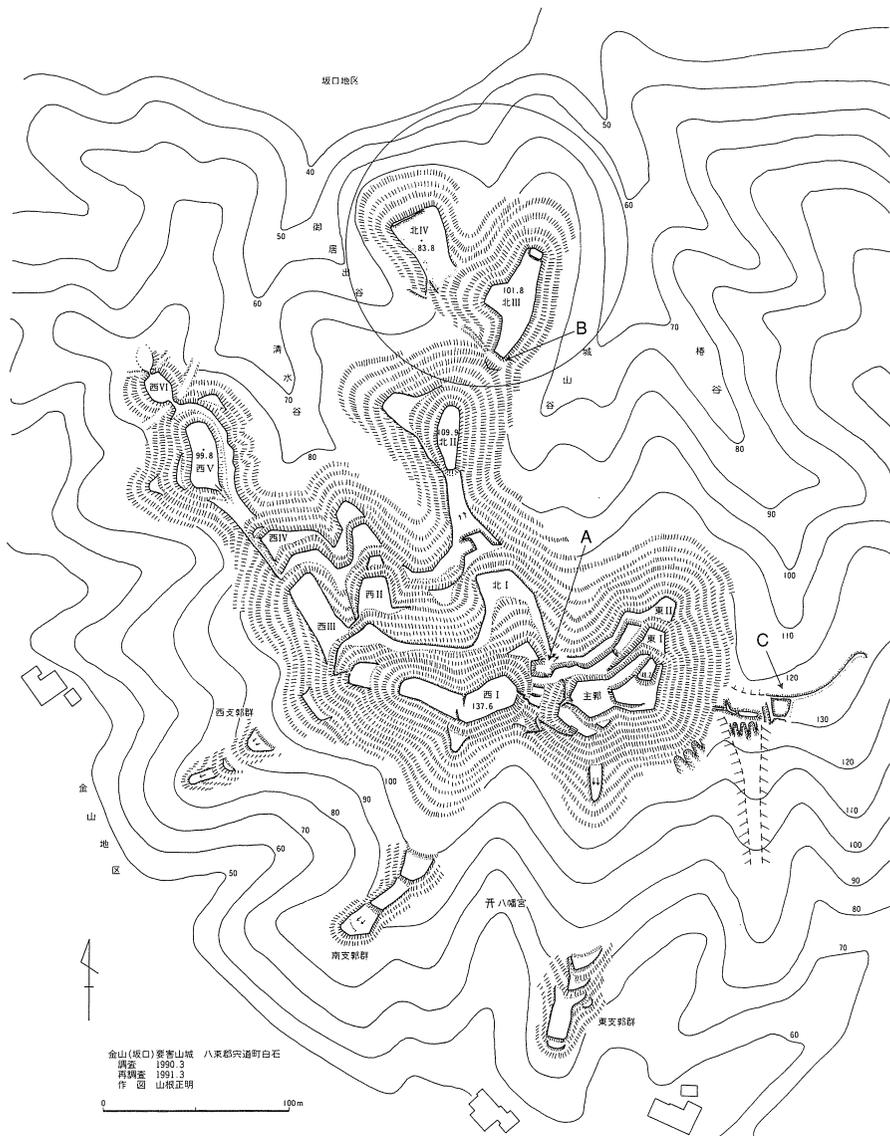
次には、縄張りにしたがって郭とか掘切、土塁、あるいは虎口などを造っていくわけですが、この土木工事を「普請」といいます。また、山城には倉庫や柵、あるいは櫓などの建物が造られることがあります。そのような建築工事は「作事」と呼んでいます。

したがって、城あるいは館が建築される順序は、まず「地取り」があって、そこに「縄張り」が考えられ、そして、たくさんの人手を要する「普請」が続き、最後に「作事」が施されて終わるという一連の流れをとります。そういう山城あるいは館が、長い年月風雨にさらされて、自然地形にほぼ近い状態に戻ったのを見ながら、我々は縄張り図を書いていくわけです。

## 2 宍道町内の山城の特徴

### かなやま さかぐち ようがいさんじょう 金山（坂口）要害山城

まず、宍道氏の本城である金山（坂口）要害山城の縄張り図をごらんください（図Ⅱ-1）。さすがに非常に雄大な、宍道氏の本城にふさわしい地取りがなされ、普請が施されています。



図Ⅱ-1 金山（坂口）要害山城縄張り図

〔宍道町史〕史料編より——以下特記しない場合、縄張り図は同書より転載

まず郭ですが、「<sup>しじゅうはちなり</sup>四十八成」と呼ばれるほど多数の郭が、金山谷に向かったの斜面に、あるいは坂口谷に向っての斜面に設けられています。そして、その中心になるのが「主郭」です。地元では「<sup>つめなり</sup>詰成」と呼ばれています。この詰成のさらに高まったところにあるのが「<sup>てんぐなり</sup>天狗成」ですが、これこそが櫓台で、当然のことながら城域全体を見渡すことができます。

主郭（詰成）とその西側の西Ⅰ郭（<sup>に</sup>二の成<sup>なり</sup>）、この2つが金山（坂口）要害山城の基本となる郭です。その二つの郭の間には大きな掘切が掘られています。底幅が6メートル、詰成との高低差が12メートルもある雄大な掘切です。このほか、西Ⅲ郭（<sup>しいのきなり</sup>椎木成）や北Ⅲ郭（<sup>きまちなり</sup>来海成）と呼ばれる大きな郭から小さな郭に至るまでたくさんの郭で構成されています。ただ、他の山城と対比して土塁が少ない点に留意しておいてください。

#### <sup>しんじょうがいさんじょう</sup>宍道要害山城

次に、現在、児童公園になっているところに造られたのが宍道要害山城です（図Ⅱ－2）。図の右手が宍道の街になります。この城は宍道氏の支城の1つで、宍道湖岸に向かって突き出した水軍城であると考えられます。<sup>さそうがわ</sup>佐々布川に沿って南方から伸び、<sup>さいがわ</sup>佐為川によって東側を削りとられた丘陵の先端に位置するわけですが、もう少し大きく見ると、西側の<sup>かんげやまじょう</sup>掛屋山城、その東側の<sup>うんしょうじ</sup>雲松寺の山城という佐々布川の西岸と東岸を押さえる山城の背後に位置し、宍道の町場（同時にそれは港でもある）を押さえる位置に造られた水軍城であると考えられ



図Ⅱ-2 穴道要害山城縄張り図

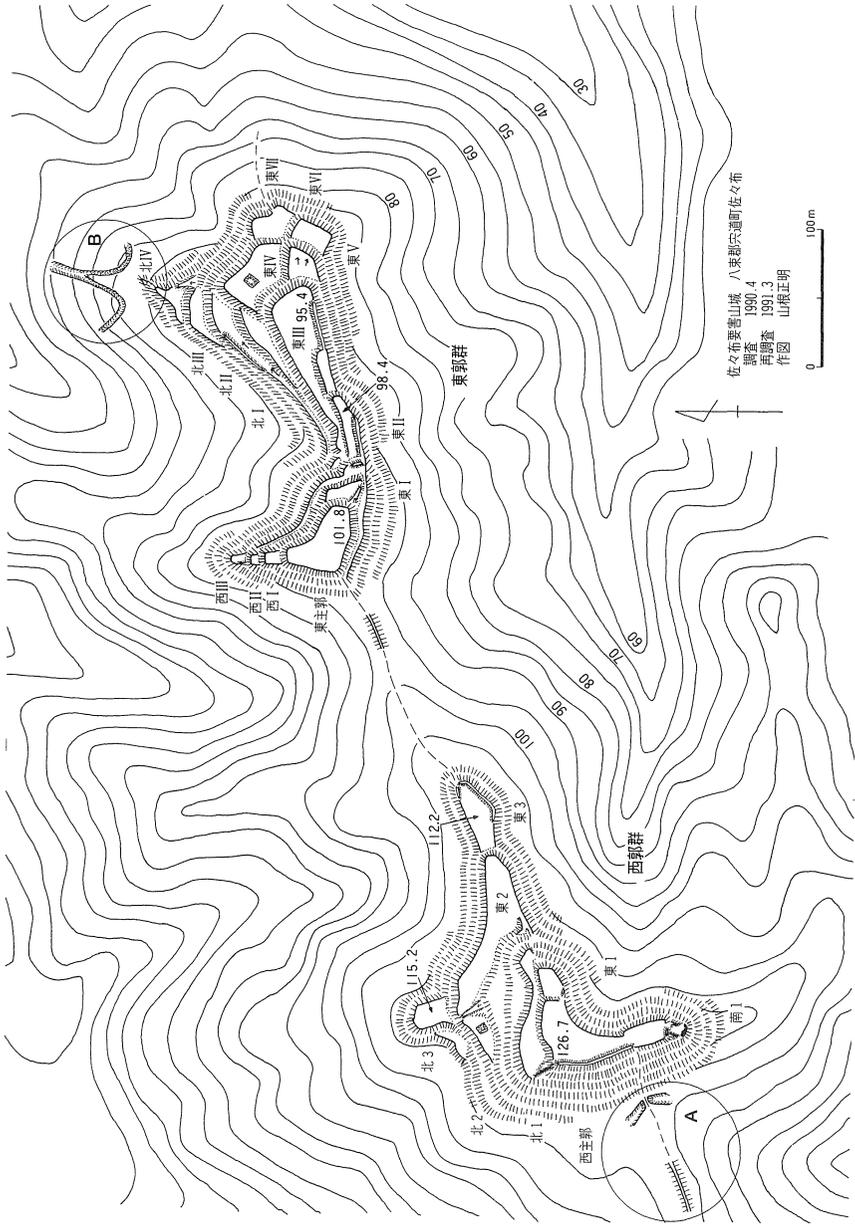
ます。

この城の場合、図2のCとWに湧水点があります。山城にとって水は非常に大事で、Cの湧水点は主郭のすぐ下という絶好の場所にあります。ただこの城は、最後までここを守りきろうという縄張りにはなっていない。本来ならば主郭の南側のくびれの位置に大きな掘切を掘って、背後を切断するはずなのですが、そういう掘切が認められないのです。これは、支城としてある程度は防衛し抵抗もするが、最後までここで支えきろうとする縄張りにはなっていないからです。土塁ももちろんありません。

もともと山頂にある古墳の石室（宍道要害山古墳）は上部が削られ天井石が取り去られ露出していますし、児童公園が造られるときにも削られた可能性があるのですが、土塁が造られていたという可能性を否定するものではないのですが、少なくとも他の削られていないはずの周辺の郭などにも土塁がないところを見ると、土塁はもともとなかったのではないかとおもっています。逆に、北Ⅱ郭の切岸に見られるように、非常に急傾斜で立派な普請がしてあります。佐々布川の川口に入ってくる船などから見られることを意識して、そういう加工がなされているものと思われる。

さそうようがいさんじょう  
佐々布要害山城

次に、佐々布要害山城（図Ⅱ-3）を見てみます。もともと佐々布氏の本城であったと思われるが、縄張りや普請は完全に進んだ技術によって造られた陣城です。こういうタイプの山城は「一城別郭の城」



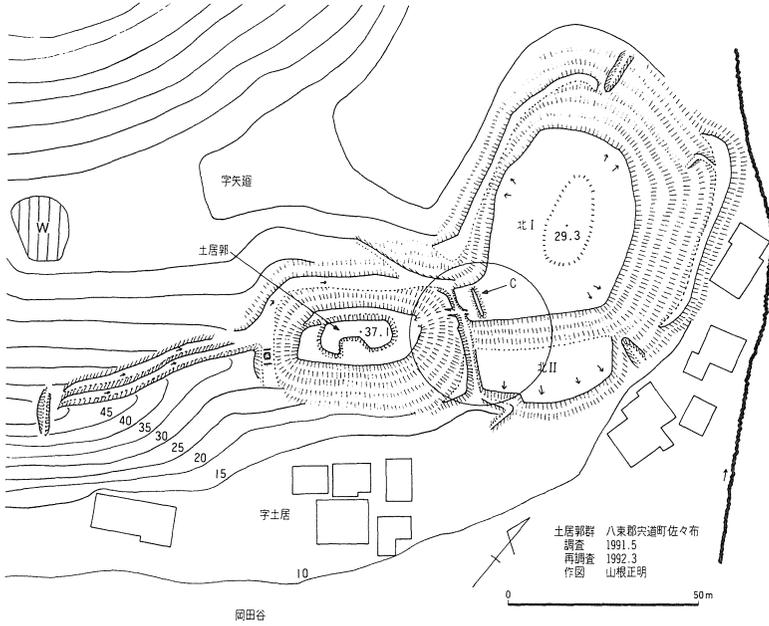
図Ⅱ-3 佐々布要害山城縄張り図

と呼ばれます。つまり、西側の郭のまとまりと東側の郭のまとまりの二つの郭群からなりたっており、両者が役割を分担しながらひとつの城として機能しているからです。東郭群のさらに東側を佐々布川が図の下から上に向かって北流しています。本来は西郭群が佐々布氏の段階において造られていて、それを改修すると同時に東郭群を新たに造ったと考えられます。東側の郭群は、佐々布川の谷を行き来する兵員を一時的にとどめて休養させたり、物資を貯めたりする役割を果たしたものだと思われまます。

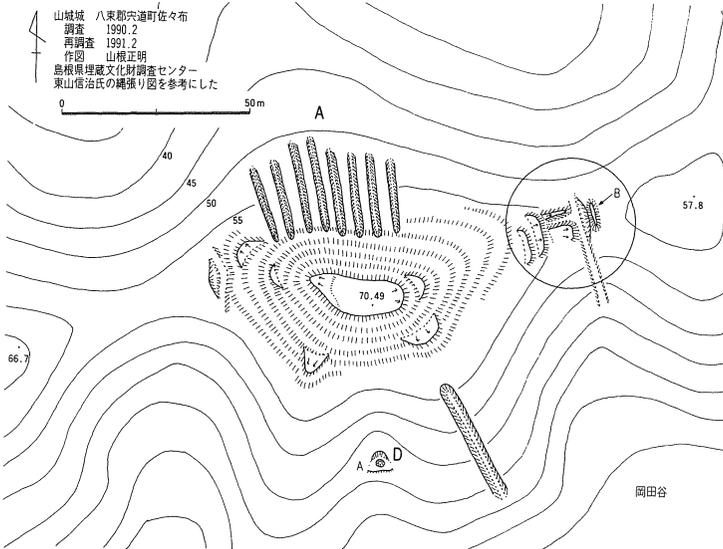
佐々布要害山城は相対的に低い地山に地取りしているので、防御は嚴重に造られています。西郭群の南側に向かった土塁のライン、あるいは東郭群の登り土塁などは非常に手慣れた技術を感じさせます。けれども防御面から考えると、西側からの攻撃には弱く、それを防ぐために、主郭の西側の尾根の両側を削ってわざと狭くし、その狭い道しか通れないようにしています（A）。この道を行き着いたところには掘切があって、その真ん中に土橋が残っています。したがって、西側から攻め込もうとすると、この狭い道と土橋しか通れないこととなります。そして、その先には南北に土塁のラインがあって防御を嚴重にしているという非常に精緻な縄張りの城です。

どいくるわぐん じょうやまじょう  
土居郭群と城山城

次に、国道54号線に面した土居郭群（図Ⅱ－4（1））と、その背後（西側）に造られた城山城の郭群を見てみましょう（図Ⅱ－4（2））。これも、本来は城山城だけであったと思われまますが、先ほどの佐々布



図Ⅱ-4(1) 土居郭群縄張り図



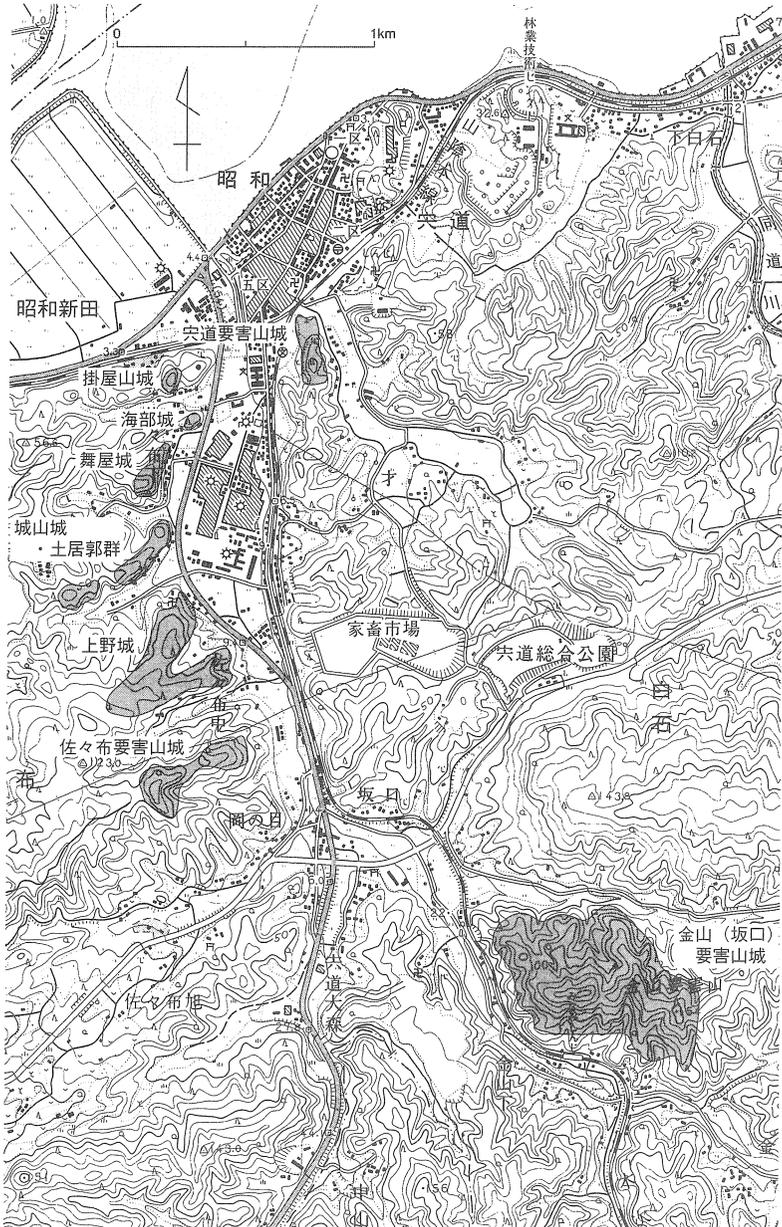
図Ⅱ-4(2) 城山城縄張り図

要害山城と同じ考え方によって改修されたものと思います。ただ違うのは、おそらく改修の途中で放棄されたものではないかと考えております。

というのも、城山城には連続する堅堀（うねじょうたてぼり畝状堅堀）が掘られていますが、この技術は非常に進んだ緩斜面防御の考え方を反映しております。それから湧水点を守るための堅堀も掘っています。ところが、中心となる主郭部分にはいたって手が加えられていないのです。

土居郭群へと続く尾根筋には堀切を掘って切断し、堀切を城道として上がるように虎口を設けています。そしてその虎口を守るために土塁を造っています。これはかざし葺土塁と呼ばれる土塁です。主郭と比較して、とても手の込んだ縄張り観に基づいた普請がなされております。土居郭群でもこれと同じ縄張り観による縄張りと言普請がみられます。土居郭群の南側には大きな駐屯空間があります。おそらく、この駐屯空間を守るための普請をするなかで、城山の改修は後回しになったのではないかと私は考えています。

というのも、現在の国道54号線、つまり佐々布川の谷を行き来する兵員を収容したり、物資を一時的に貯めたりする役割を果たす陣城が、佐々布川の左岸に点々と造られているからです。これから先は私の推測なのですが、宍道氏が毛利方として出雲国に帰ってきた時点に、宍道氏に返還されたのは佐々布川右岸の地域であって、左岸においては毛利氏の配下の他の武将たちの駐屯地として開放されたのではないかと考えるわけです。（図Ⅱ－5）

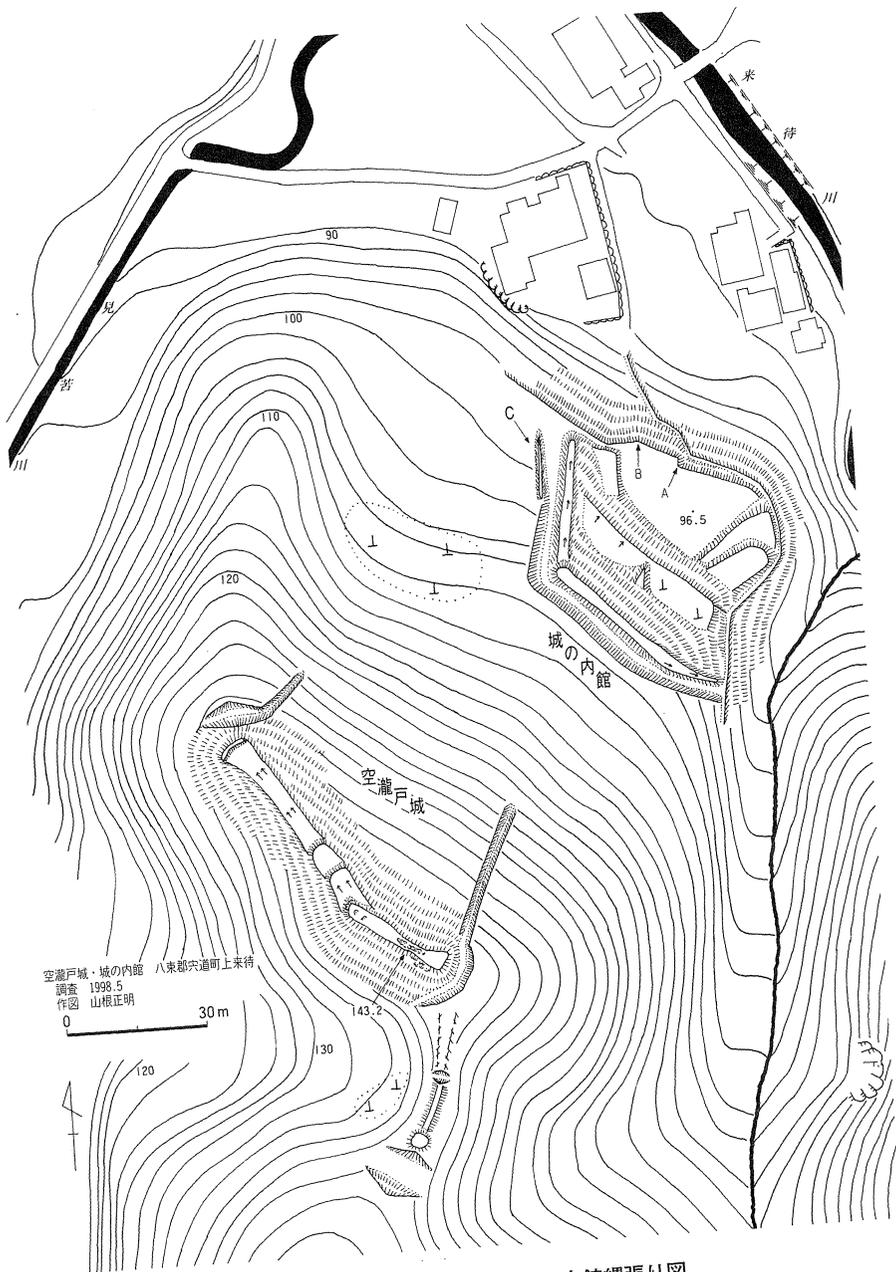


図Ⅱ-5 佐々布川流域の陣域群

例えば、佐々布要害山城の縄張り図では、東郭群の北東に、二つの尾根を掘切で切断して、その切断した掘切を合流させて下方に向けて下らせていく技法がみられますが（図Ⅱ－３のB）、実はこれとそっくりなのが邑智郡邑南町（旧瑞穂町）の二ツ山城ふたつやまじょうにあります。これはいずは出羽氏の本城ですが、このような普請は石見から安芸にかけての中国山地の脊梁部分の国人領主の城の造り方によく見られる技法です。断言はできませんが、少なくともこの普請をした人物、あるいはその縄張り観そのものは毛利支配下の地域の武将のもので、その武将が佐々布川右岸にやってきてこしらえたものではないかと考えているわけです。

このような技術の伝搬は、もっとスケールの小さな山城にも見受けられます。来待の菅原にある空瀧戸城そらたきどじょうと城の内館しろ うちやかた（図Ⅱ－６）の場合がそれです。空瀧戸城は、東の来待川と西の見苦川の合流点を見下ろす丘陵の突起部に地取りをしています。城の内館はおそらく狩野氏かのうの館跡でしょう。館の背後の斜面にはコの字型に横堀よこぼりが掘られています。横堀をめぐらせて居館を囲い、掘り上げた土でもって土塁を築いています。居館の北側は切岸を高く削り落としています。そして、例えばAではわざとへこませたり、Bではわざと出っ張りを出していますが、これらの普請がはじめに述べた横矢なのです。

そして、館の背後に、規模としては非常に小さなものですが山城を築き、その主郭を守るために掘切を入れています。この掘切は横堀状になっていて、それをさらに豎掘につなげています。こうした普請で



図Ⅱ-6 空瀬戸城・城の内館縄張り図

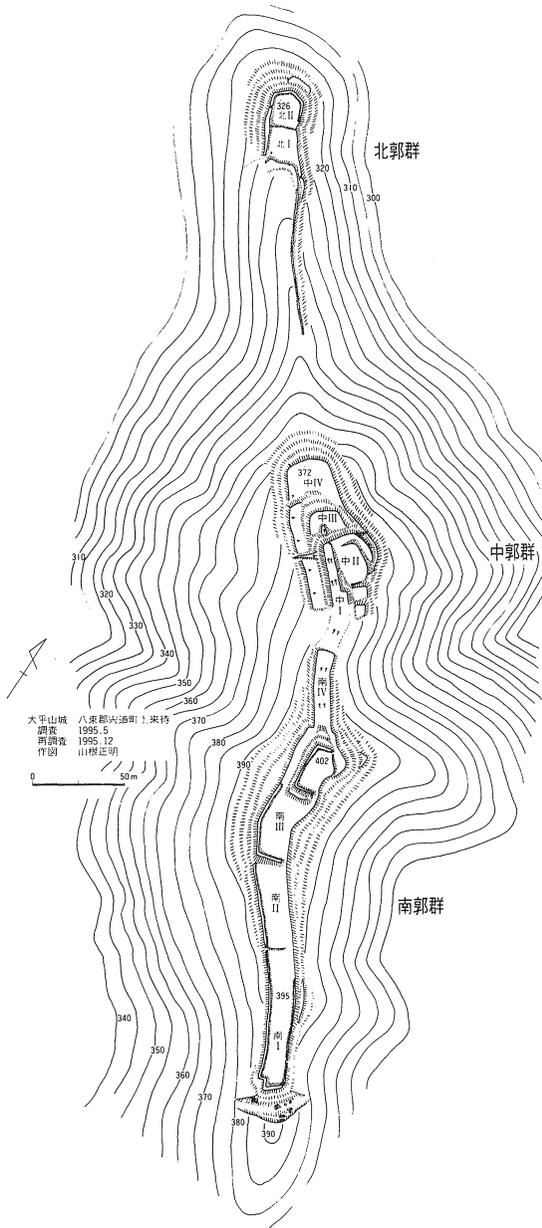
尾根筋からの攻撃を防ぐ縄張りになっています。

このように、居館の背後に山城を構えるタイプを「ねごやしきやまじろ根小屋式山城」といいますが、これはまさしく教科書的な配置になっています。さらに今述べたように小規模ながら高度な技法が盛り込まれているのです。

### たいへいざんじょう 大平山城

次に、菅原から小林、そして和名佐、奥大谷へと向かうルートの途中にある大平山城を見ましょう（図Ⅱ－7）。宍道町内の山城調査は本当にびっくりさせられることの連続だったのですが、これにもびっくりさせられました。来待川の谷に向かって突き出した尾根の上に、こんな大規模な加工をしているわけです。南側には大きな堀切を掘って尾根筋を切断しています。堀切のほぼ中央に岩が積まれて土橋のようになっていますが、山仕事に便利なようにというので後になって造られたものだそうですから、ずいぶん雄大な堀切だったのでしょう。この山城の南郭群にある主郭（402メートル）と一番低い北郭群の北Ⅱ郭（326メートル）との高低差は76メートルです。その間の尾根筋は約500メートルもあります。こんなにも長大で、高低差もまた大きな城を造らなければならなかったほどに、来待の菅原から小林、和名佐、そして大谷というルートは重要だったと逆に証明してくれているのだと思われます。

この大きな堀切に対してざっくりとへこんだ土塁をつくっていますが、これは横矢がけを意識しています。高さ約1～1.5メートルの土塁のラインがずっと続いていて、これは登り土塁といっています。そ



図Ⅱ-7 大平山城縄張り図

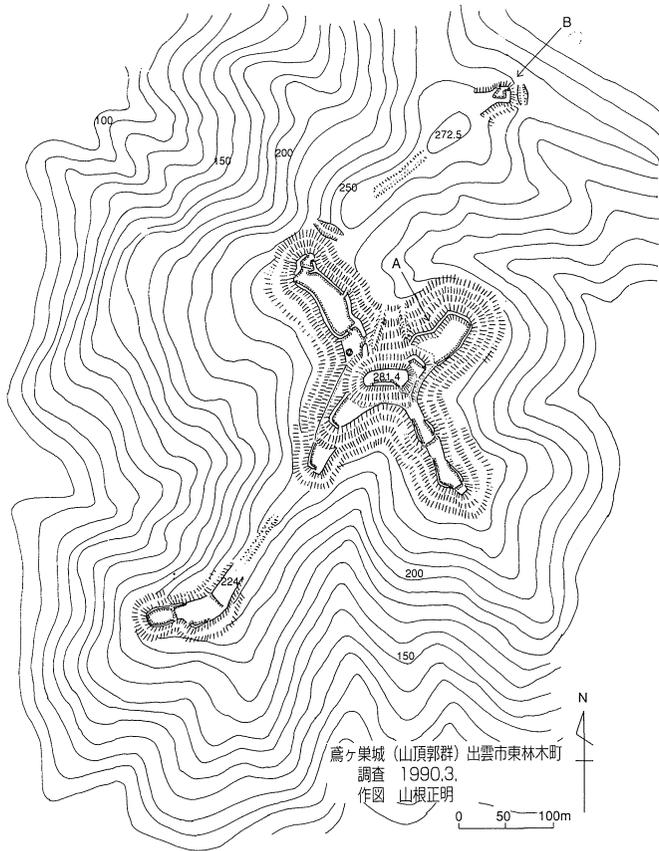
して、攻められやすい一番低いところは土塁で固めた虎口を設けると  
いう普請を施しています。

### 3 鳶ヶ巣城と熊野城について

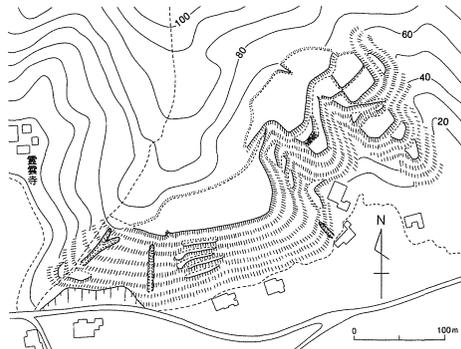
#### とびがすじょう 鳶ヶ巣城

以上、宍道町内の山城をみてきました。宍道氏は、毛利氏にしたが  
って永禄5年（1562）に出雲に復帰しますが、直接宍道に入るのでは  
なく、しばらく鳶ヶ巣城（出雲市東林木・西林木町）に城将としてと  
どまります。鳶ヶ巣城は、毛利氏が出雲の平坦部に乗り込んで最初に  
造った山城です。山頂部分の縄張り図をみると（図Ⅱ－8（1））、四方  
に張り出した尾根の上にそれぞれ郭を配しています。土塁をわざとへ  
こませて、横矢がかけられるようにするといったように緊迫感が感じ  
取れる縄張りになっています。現地に行ってみると、実に見事な土塁  
で囲まれています。山頂によくもこういう大きな加工をしたものだと  
思われるほどの底幅の広い土塁で囲ってあります。

ところがその山麓部には、ほとんど土塁などを持たない広い郭を中  
心とする郭群があります（図Ⅱ－8（2））。このように鳶ヶ巣城は山頂  
と山麓の2つの郭群からなっています。佐々布要害山城は東西に二つ  
の郭群がありましたが、その役割をいわば上の郭群が分け持っていた  
わけです。つまり、まず山頂部に郭群が造られ、尼子家との戦いや占  
領地域の支配などが毛利方に有利に展開していくと、今度は山麓部の  
郭群が造られて、駐屯地や物資輸送の中継地としての役割を果たすこ



図Ⅱ-8(1) 鷹ヶ巣城 (山頂部) 縄張り図



図Ⅱ-8(2) 鷹ヶ巣城 (山麓部) 縄張り図 (島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』1998年より)

とになっていくわけです。

<sup>くまのじょう</sup>  
熊野城

次に熊野城（八雲村）をみたいと思います（図Ⅱ－9）。永禄5年に宍道氏が出雲に戻ってきたことは既にお話ししましたが、永禄6年9月頃から吉川元春を大将とする毛利勢がこの城を攻めます。というのも、熊野<sup>ひょうごのすけ</sup>兵庫助は、白鹿<sup>しらがじょう</sup>城が開城してしまってから後も尼子方として頑張り続けるからです。永禄8年1月に熊野氏はいったん降伏しますが、山中鹿介らが出雲に帰ってきて尼子家の復興をはかろうとすると、兵庫助は再びこの城を拠りどころにして毛利方と戦います。<sup>やまなか</sup>山中鹿介<sup>しかのすけ</sup>が兵糧を入れようとしたのもこの熊野城に対してなのです。

この城は、金山（坂口）要害山城と似ているところがあります。基本的な縄張りは、いくつもの郭を積み重ねて、その切岸で防御するという考え方です。スケールの大きな根小屋式の山城といえなくもなく、熊野城の東麓に熊野氏の館があったと思われます。麓の館との間の連絡の確保のために、お雛様の段のような郭（<sup>ひなだんじょうおびぐるわ</sup>雛壇状帯郭）を設けています。斜面防御にそういう普請を導入する以外は、掘切も土塁も持たないのがこの山城の特徴です。熊野城には、<sup>あまのたかしげ</sup>後に天野隆重という、山中鹿介らの攻撃から富田月山城を守りぬいた毛利方の有力武将が入ってきて城を預かっています。天野家屋敷という居館跡もあるのですが、天野氏が熊野城に特に手を加えたとは思われません。したがって、熊野城には出雲の在来の普請技法あるいは縄張り観が表れていると私はみています。



図Ⅱ-9 熊野城縄張り図（島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』1998年より）  
東麓に「土居成」と呼ばれる屋敷地があり、熊野氏の居館跡と推定されている。ここから主郭に至る緩斜面に離段状に帯郭が築かれているのが注目される。

## 4 宍道氏の帰還と金山（坂口）要害山城の整備

### 在来技法と外来技法の混在

熊野城と宍道氏の本城である金山（坂口）要害山城とは共通性があると述べました。ただ、金山（坂口）要害山城には土塁がないわけではありません。例えば、「馬の背」と呼ばれる主郭の東側には「馬洗うまあらい池いけ」があって、これを守るために土塁を築き、その背後の緩傾斜面には連続塹堀を3本掘っています。そういうところに新しい技法が入ってきています。また、雄大な掘切や櫓形虎口も認められます。いわば出雲在来の技法と、大内氏、毛利氏と仕える戦国大名を替えながら、その間にあちこち転戦しながら、宍道氏が学びとったと思われる技法とが混在しているのが金山（坂口）要害山城なのです。

### 水の手みづのての整備にみる高度な技術

金山（坂口）要害山城には極めて高度な技法が採用されています。水の手（水源）がそれです。金山（坂口）要害山城の水の手は、坂口谷の奥の「ぼっか池（坂口溜池）」という大きな溜池からの水が「比ひ久ひ尼にヶ池が池」に落とされ、そこから延々2,720メートル（地図上の計測。山ひだの凹凸があったはずなので、実際はもっと長いかもしれない。）という遠距離を、山腹に延々と水路を造って主郭の直下の馬洗い池まで引いてきているのです。

普請途中で捨ててしまったと思われるような水路跡も確認されています。つまり、その水路をずっと伸ばしていったとしても、「金毘羅こんびら成なり」とか「来待成きまちなり」と呼ぶような主郭よりだいぶ低いところまでしか

水をもってこられない、それではせっかく水を引いた水の手の効果が減殺してしまうからなのです。

こういう高い位置に水を引いてくる技術はすごいものです。2,720メートルの距離を高低差16メートルで引っ張るわけですから、計算すると平均勾配は0.59%です。これは今の下水道の本管よりもちょっと緩い勾配になるそうです。当時の高い測量精度と、それに基づいて実際に凹凸のある山ひだに水路を造ってゆく、普請技術の高さをここにみることができます。

#### 敵を誘い込む巧妙な縄張り

また、戦闘のための城ですので、金山（坂口）要害山城には縄張りの妙とでもいべきものも盛り込まれています。戦闘正面としては西側、つまり現在の54号線側から攻められることを意識して造ったと思われま。北西にある「熊藪尾根」と呼ばれるあたりから詰成まで、どう防ぐかを考えて普請が施されています。

そこで、この金山（坂口）要害山城を攻略する寄せ手の立場で考えてみましょう。攻め口がないわけではありません。南東の丘陵からという手もありますが、この切岸は急すぎます。また、こうした谷あいからの攻め口は、両側の郭から俯瞰ふかんされます。したがって、寄せ手が考える攻め口としては、どうしても、一番なだらかな尾根筋である熊藪尾根からということになるかと思えます。

さらに寄せ手の立場で考えてみましょう。そうすると、まず掘切を渡ってから攻め込むことになります。土橋を通らないといけないので、

「茶臼成」<sup>ちやうすなり</sup>から狙われることとなります。茶臼成を突破しようとする  
と、ぐるっと東側の裾を回り込まなくてはいけないので、回り込む過  
程で茶臼成から横矢をかけられるわけです。一方、茶臼成にこもった  
兵は、ほどほどで引き揚げるでしょう。寄せ手は、今度は西側の通路  
を攻め上がることとなります。この通路はわざと狭くしてあって、  
「椎木成」<sup>しいのきなり</sup>などから弓矢や鉄砲を撃ち下ろされたり、横矢をかけられ  
たりすることになるでしょう。ここを突破して、斜面を上がって上がり  
込んだらしめたものだというわけではなくて、「馬乗馬場」<sup>まのりばば</sup>とか  
「長成」<sup>ながなり</sup>にたどり着いても、いざ中心部分に攻め込もうとすると、梟  
形虎口が設けられて待ち受けているわけです。つまり、ずいぶん犠牲  
を払いながら虎口にたどり着きこれを突破したとしても、さらに大き  
な掘切があって、掘切の底に入ると「二の成」<sup>にのなり</sup>や「詰成」<sup>つめなり</sup>からまた狙  
われることとなります。このように、狭い城域の中を郭と通路を配置  
しながら寄せ手に犠牲を強要する巧妙な縄張りになっているのです。

### 金山（坂口）要害山城の完成

図Ⅱ－１の縄張り図は最終状態ですが、このような状態になった時  
期はいつ頃なのか。それは、宍道氏が出雲に戻り、そして宍  
道の地に帰ってきた永禄6、7年頃以降であろうと思われます。縄張  
り図の北側の北Ⅳ郭には掘切や土塁があります。ここは「御居出成」<sup>おいでなり</sup>  
と呼ばれていて、宍道氏がここにおいでになった、つまり住まいをし  
たところだといわれています。確かに雨落ち溝らしいものもあつたり  
して、ここにはそのような館が置かれていたと思われます。復帰して

きた宍道氏が宍道地域の支配のためのいわば政庁（役所）として整備したものではないかと思えます。この背後にあたる北Ⅲ郭（<sup>きまちなり</sup>来海成）の北側には、櫓台も配置されています。

このような縄張りから、平素の地域支配は御居出成で行われ、いざというときには主郭に移って立てこもるという考えによって金山（坂口）要害山城は最終的に普請されたのではないかと考えられます。

私たちのとっている方法は、発掘調査を伴わない方法ですので、周辺観察を精密に行ったといえども限界があります。したがって、今後、例えば金山（坂口）要害山城を町・市指定からさらに県指定へと格上げする中で、例えば重要なところは発掘調査をするなどして新しい事実が解明できるのではないかと期待しているところです。

（島根県立大社高等学校教頭・宍道町史執筆委員）

### Ⅲ 宍道・<sup>かなやま</sup>金山五輪塔群について

西尾克己  
稲田信

#### 1 はじめに

金山五輪塔群は宍道町大字白石字金山下小字<sup>きょうけいじ</sup>経慶寺に所在し、来待石製の<sup>はくし</sup>大五輪塔2基と数個の小五輪塔、石塔などからなる石塔群である。石塔群中の<sup>たほとけ</sup>大五輪塔2基は、地元では「田仏さん」(注1)と呼ばれ、昔から皮膚のイボ封じに効くということでお参りがあったという。

小字「<sup>きょうけいじ</sup>経慶寺」に接して、「<sup>たほとけ</sup>田佛」の他にも「<sup>きょうけいじ</sup>経慶寺下モ」「<sup>きょうけいじ</sup>寺ノ脇」「<sup>きょうけいじ</sup>寺谷」「<sup>きょうけいじ</sup>経慶寺作直上」「<sup>きょうけいじ</sup>経慶寺谷」「<sup>きょうけいじ</sup>経慶寺西平」「<sup>きょうけいじ</sup>経慶寺東平」などの地名が残っており(注2)、1922年(大正11)には火災に遭った曹洞宗<sup>ほうりゅうじ</sup>豊龍寺が南宍道駅脇の旧地(現金山下公民館)から「<sup>きょうけいじ</sup>寺谷」に移っている。字名の由来となったであろう<sup>きょうけいじ</sup>経慶寺そのものの堂宇は現存しないが、地名配置を見るかぎり比較的広い寺域をもつ寺院だったことが理解できよう。

今回紹介するも

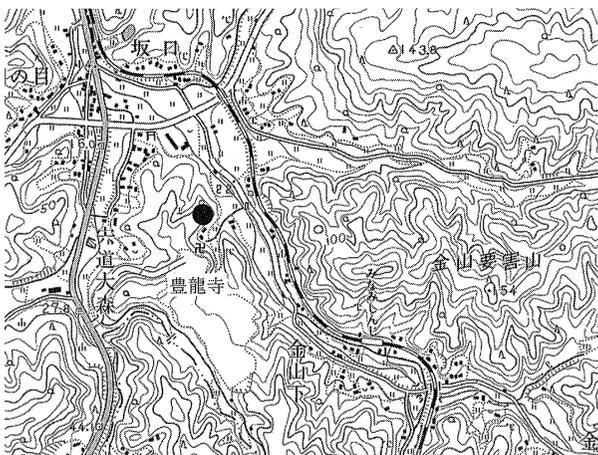


図1 金山五輪塔群位置図 (●印: S=1/25,000)

のは、石塔群中の2基の大五輪塔で、北側の基壇を伴うものを1号石塔、南側のものを2号石塔とした。

(注1)『宍道町誌』1963 には「田仏(金山) 豊龍寺の開基普得大居士の墓と伝えられ、墓石は今田の中にある。歯痛、子供の虫、下の病気等に靈験があるといわれる。」とある。五輪塔所在地に隣接して「田佛」の字名も残る。現在の豊龍寺側より、石塔群の東側を通り、五輪塔群のある尾根へ上る径と尾根先端側から石塔群に向かう径があり、かつてはそこから五輪群(田仏)を参拝したようである。

(注2)黒田祐一『宍道町歴史史料集地名編』宍道町教育委員会  
1995

## 2 五輪塔群の概要

### (1) 1号石塔

1号石塔は基壇をもつ五輪塔である。基壇は尾根に直行して溝を掘り、切り離れた残丘を墳丘状に整えている。形状からして、基壇の北面は溝の掘削土と基壇の北側尾根の整地時に生じた土で盛られている可能性がある。溝の掘り込みは、現状で底部幅1～2m、高さ1mを測る。

基壇の残存状況は良好である。平面プランはほぼ正方形で、東西7.5m(約4間)である。高さは1m。基壇の上面もほぼ正方形で、一辺4m(約2間強)程である。石塔はその中央に置かれている。石塔



図2 金山五輪塔群周辺の地名（『穴道町歴史史料集地名編』より）

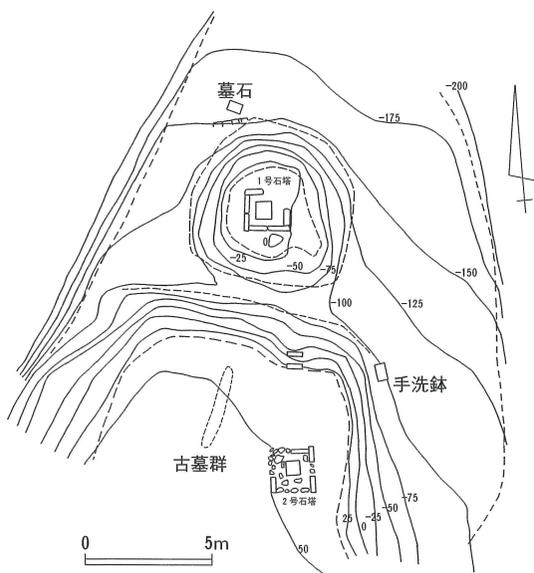


図3 金山五輪塔群地形測量図

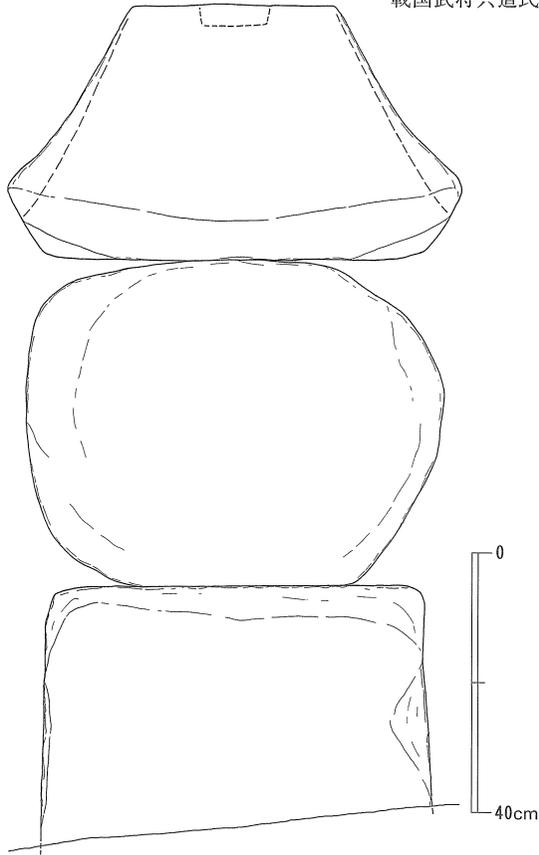


図4 1号石塔実測図（笠は復元位置）

の回りには凝灰岩質砂岩（来待石）の切石などで四角に並べられた一辺約2mの囲いが存在する。また、表面観察によると、基壇上面の端には形状を整えるためのものと考えられる石垣状の石列が廻っている。

石塔は来待石（凝灰質砂岩）製の五輪塔である。水輪、地輪が基壇の上に組まれた石囲い中央に据えられているが、火輪は崩れ落ちて、

基壇上面の端部に埋まっている。空風輪は既に失われている。

火輪から地輪までを復元すると、高さ約135cmで、空風輪を合わせると、おそらく総高1.8m程度の大型品である。地輪は一辺約60cm、高さ約55cmの長方体で、上面に向かってやや細くなっている。水輪は風化のために不整形だが、横広がり球形で、最大幅63cm、高さ50cm、上面径約32cm、下面径約34cmを測る。上面の窪みは風化のため、また、下面の窪みも解体できなかつたので不明である。火輪は屋根型で、下面幅58cm、上面幅31cm、最大幅70cm、高さ39cmである。軒の高さは中央部6cm、端部で11cm、軒線は弧を描く。上面の平坦部には空風輪を支える窪みが穿たれている。窪みは上辺で11cm、下辺で10cm、深さは3cmを測る。

2号石塔のように梵字が彫られていた可能性はあるが、表面の風化が進んでおり、判読はできない。

## (2) 2号石塔

2号石塔も来待石（凝灰質砂岩）製の五輪塔である。加工された平坦面の東側に位置し、基壇をもつ1号石塔の東側12mに建ち、一辺2mの正方形の石囲いがある。石囲いは細長い切石等を組んでおり、1号石塔の石囲いとほぼ平行であることから、1号石塔、2号石塔とも一定方向へ正面を意識して向けてあることが想定できる。

2号石塔は総高175.5cmの大形品である。地輪は長方体で、辺50cm×47cm、高さ46cm。水輪は下膨れの球形で、最大径52cm、高さ45cm、上面径40cm、下面径38cmを測る。上面と下面に見られる窪みは石塔を解

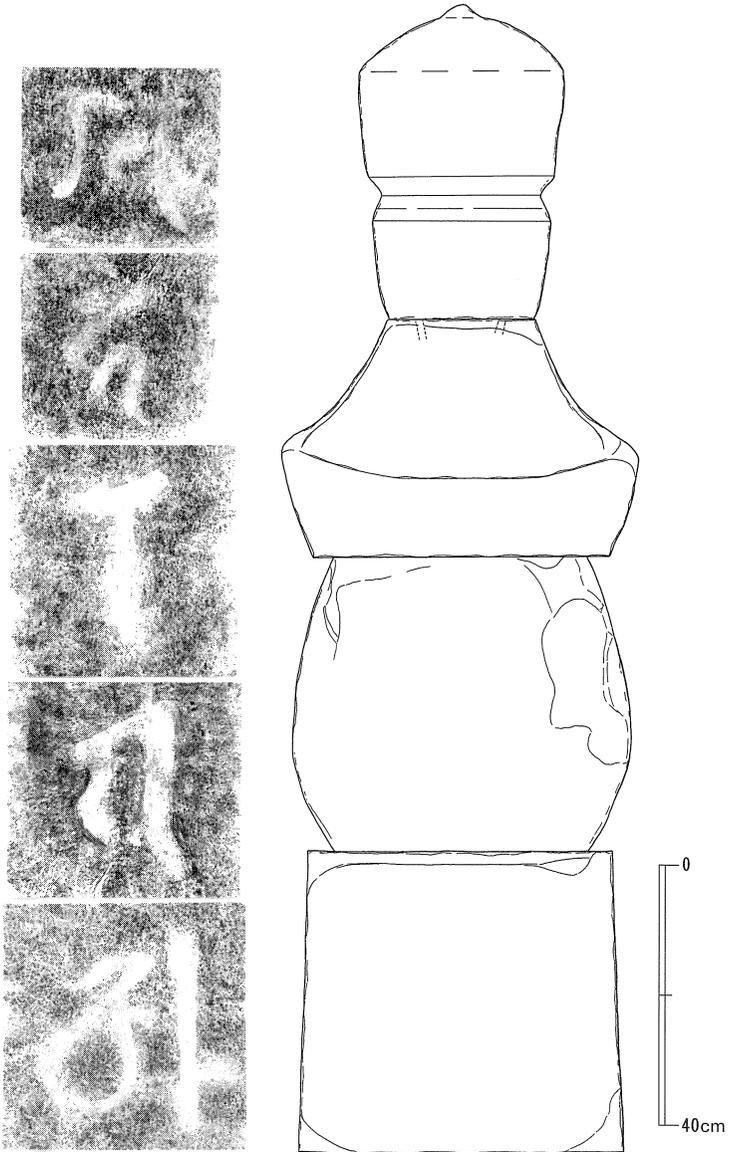


図5 2号石塔実測図

体することができないため、確認できなかった。火輪は屋根形を呈し、下面は46cm、上面23cm、高さ36.5cm、軒の高さは、中央部12cm、端部で15cm、軒線は弧を描く。上面の平坦部には空風輪を支える窪みが穿たれている。辺14cmであるが、深さは不明。空風輪は砲弾形を呈し、中程に深さ1.5cm～2cm、幅3.5cm程の凹帯が巡り、空輪と風輪とを分けている。頂部は尖り下方のほぞは径12cmを測るが、長さは不明である。総高は48cm、空輪の最大径は32cm、風輪の最大径は28cmを測る。

本塔の空風輪、火輪、水輪、地輪の東側には葉研彫りによる梵字がある。風化が進み、読みにくいものの、発心門（キヤ・カ、ラ、バ、ア）の梵字が認められる。

2号石塔は1号石塔に比べ明瞭な基壇（あるいは区画）を持たないことや、水輪が他の部位に比べてバランスが悪いことなどから、後世に現在地へ移転された可能性も考えられる。

### (3) 1号石塔・2号石塔の時期について

2基の五輪塔について、形態の特徴より制作の年代をみてみたい。

1号石塔は空風輪を欠くため、詳細な時期を決めるのは難しい。残っている火輪は底面が水平で、降棟（棟線）は反りが少なく、直線に近い。また、軒線の反りはあるものの、2号石塔ほど大きくない。さらに、水輪は風化が著しいが、球形を呈する。

2号石塔は空風輪から地輪まで総て遺残している。時期を知るうえで、形態の変化をよく示す空風輪は、砲弾形を呈し、中程に浅い溝状の凹みを有する。火輪は反りのある降棟と軒線が認められる。これら

の要素をもつ来待石製の五輪塔は中世期末から近世初頭のものといわれている。(注)

なお、1号石塔と2号石塔との形態上の違いは、火輪の棟線の反りや軒線の高さや反り具合及び水輪の形態である。両者の形態を比べた場合、1号石塔の方が2号石塔より古い要素をもつと考えられる。しかし、両者の年代差がどれほどあるかは、現時点では定かにしえない。

(注) 間野大丞「来待石製五輪塔・宝篋印塔について～中世末から近世初頭を中心に～」『来待石を中心とした日本海文化－石造物研究会第2回研究会資料』石造物研究会・来待ストーン客員研究会 2001

### 3 宍道・金山五輪塔群と宍道氏

#### (1) 宍道氏の活躍した時代

中世の宍道地域には来海荘<sup>きまちのしょう</sup>、宍道郷<sup>しんじごう</sup>、佐々布郷<sup>さそう</sup>、伊志見郷<sup>いじみ</sup>という1荘3郷が並ぶように存在しており、独自の空間領域と歴史を刻んでいた。宍道郷、佐々布郷は、古代には意宇郡宍道郷<sup>ししちのさと</sup>（宍道駅<sup>うまや</sup>を含む）と呼ばれていた佐々布川流域の地域が発展したものである。文永8年(1271)の「関東下知状案」<sup>(註1)</sup>によると、宍道郷に成田某、佐々布郷に佐々布左衛門入道子と記されており、宍道郷には承久の乱後には新補地頭としての東国御家人・成田氏がおり、佐々布郷には古くからの在地領主の佐々布氏がいたことが知られる。その後も、佐々布氏は佐々布郷での勢力を保つが、宍道郷は正平7年(1352)に、南朝方の

足利直冬によって宍道南方が没収され<sup>(注2)</sup>、永享2年(1430)の「杵築大社三月会一番饗神物引付」<sup>(注3)</sup>によると、出雲国守護京極氏の一族、宍道氏が成田氏に代わって宍道郷を知行していたことが知られる。

宍道氏は出雲国守護京極高秀の子息秀益を初代とする佐々木京極氏の一族で、宍道郷を獲得し、ここに拠点を構えたところから地名をとって宍道氏を名乗ったものである。宍道氏の動向は残された文献より徐々に明らかになりつつあり、戦国大名尼子氏の「一族衆」としての地位を保って活躍するが、その実態についてはまだ不明な点が多い。その中で、宍道隆慶、宍道政慶親子の活躍は戦国期の激動を示すとともに、今も残る山城等の形成にも大きくかかわったと思われる。

天文11年(1542)、宍道隆慶は尼子氏と袂を分かって周防(山口県)の大内義隆の尼子攻めに参加する。しかし、尼子攻めの失敗により隆慶(久慶)、政慶親子は大内氏に従い、やがて毛利氏方の武将として永禄5年(1562)、毛利氏の尼子攻めに従い、旧領地を安堵される。この親子は毛利氏方の武将として、家臣団の再編成を行うとともに、かつては、独立した所領であった来海荘・宍道郷・佐々布郷を一円的に支配しつつ周辺部にも勢力を拡大する。また、金山(坂口)要害山城の整備・拡充に併せ、周辺を支城とする城郭群の再構築、再編成をおこなったと考えられている。

## (2) 宍道氏と経慶寺

宍道氏の系統は現存するいくつかの家譜、家系図によりおぼろげながら復元が試みられている<sup>(注4)</sup>。この中で、井上寛司氏は「①諸系図

にいう「久慶」は、宍道隆慶と同一人物ではないか。②久慶の「久」の字は尼子経久から与えられたものではないか。③久慶の次に記された経慶が、新宮党の首領尼子国久の息女を妻とし、かつ二八才という若さで死亡していることを考えると、彼は本来隆慶の跡を継ぐべき総領であったのが、尼子晴久の権力確立の過程で不慮の死をとげ（この点で前掲一一四号の『陰徳太平記』の逸話はきわめて興味深い）、そのことが一つの引金となって「宍道氏の出雲退去」がおこったのではないか。」<sup>(注5)</sup>と推測されている。諸系図中の宍道経慶をみると、

「**経慶** 民部太夫 **経台寺殿** 湯郡内宍道郷 妻尼子国久女、廿八歳二而逝」

「**経慶** 民部太夫 **経慶寺殿** 湯郡内宍道 尼子紀伊守婿、廿八歳逝去了」

「**経慶** 民部太輔 妻尼子紀伊守国久女 **経慶寺殿**、二十八歳卒」

「**経慶** 民部太輔 母 生年月日不知 死二十八歳 妻尼子紀伊守国久女、」<sup>(注6)</sup>とある。

推論の域を出ないのかもしれないが、以上の内容をつなげていくと、金山の経慶寺は宍道久慶＝隆慶の子、宍道経慶の菩提寺であり、比較的広大な敷地は、隆慶（久慶）・政慶親子が永禄5年（1562）毛利氏に旧領地を安堵されて以降、その新たな権力の下で整備を行ったものと推測できる。

宍道氏諸系図にみられる宍道経慶の享年二八才の死が『陰徳太平記』<sup>(注7)</sup>に記されるような非業の死であり、そのことが宍道氏の出雲国転出の理由の一つとなったとすれば、隆慶、政慶親子が特別な思いをも

って菩提寺の経慶寺を建立し、その墓所（或いは供養塔）を営んだのではなかろうか。

なお、先述のように地元では「田仏（金山）豊龍寺の開基普得大居士の墓と伝えられ、墓石は今田の中にある。」といわれ、また、今回の石塔調査中に「子どもの頃からこの五輪塔（2号石塔）を宍道伊予守の墓と聞いている。1号石塔については、特に、だれの墓ということは聞いていない。」という伝承も採録された。豊龍寺の開基普得大居士とは宍道隆慶のことであるが、1号石塔あるいは2号石塔の性格を伝えているのであろうか。再び宍道氏家系図を紐解くと、

「久慶 遠江守 湯郡内完道 法隆寺殿、法名不徳、尼子伊予守婿、雲州之内島根（秋鹿・楯縫）三郡預之、八千貫本領 或云 雲州宍道金蔵山豊龍寺ニ在牌及木像 長壺尺計 豊龍寺殿心月普得大居士神儀 **伊予守**ト云」

「久慶 遠江守、**伊予守**、於雲州楯縫郡完道郷、金蔵山豊龍寺大檀那室尼子伊予守女、秋鹿・楯縫・島根三郡八千貫領 法名豊龍寺殿心月普得大居、」

「久慶 遠江守、**伊予守**、秋鹿・島根意宇三郡、妻尼子伊予守経久女、」  
「三十七世完道**伊予守隆慶** 正次長男 文亀二 〔壬〕戌三月十九日降産、天文廿三年〔甲〕寅四月八日**経慶寺葬**、」<sup>(注8)</sup>

という記載がある。宍道氏系図は史料批判を踏まえた上で取り扱いを慎重にせねばならないが、久慶＝隆慶が伊予守を名乗っていたことや経慶寺に葬られた（没年は明らかに異なる）との記述は興味を引く。

(注1)『宍道町史史料編』古代・中世48 1999 (以下『宍道町史史料編』については略記)

(注2)『史料編』古代・中世65

(注3)『史料編』古代・中世70

(注4)『史料編』古代・中世215～221)

(注5)『史料編』古代・中世219

(注6)『史料編』古代・中世216～219

(注7)『史料編』古代・中世114

(注8)『史料編』古代・中世217～220

#### 4 まとめにかえて

今回、宍道町大字白石字金山下小字経慶寺に所在する金山五輪塔群のうち、「田仏」と呼ばれる2基の大型の五輪塔を紹介した。来待石製の五輪塔の形態から見ると、製作年代は概ね室町時代末から江戸時代初頭の範疇に含まれるのである。石塔の各輪は約60cm（2尺）前後の大型の石材が使用されており、宍道町内でも伝大野次郎左右衛門墓（宍道町上来待）に次ぐ規模を有するものである。

2号石塔については、後世の移設の可能性を捨てきれないが、1号石塔については、一辺4間、高さ半間の明瞭な基壇をもつことから、五輪塔設置時の位置を保っていると考えられる。現在、小字「経慶寺」には、この2基の大型の五輪塔に比肩できる石塔は確認されていない。うえ、金山地区の谷間を見通しても類例はない。金山五輪塔群の2

基の石塔こそ、まさに、経慶寺建立の由来となった人物、また、その人物に近い関係者の墓所（或いは供養塔）と推定することができよう。

今回、金山五輪塔群を調査するにあたって、豊龍寺住職野村泰久師には格別の配慮をいただいた。また、伊原茂夫氏、福田明正氏には貴重な地元での伝承をお聞かせいただいた。謝意を申し上げたい。

※「Ⅲ 宍道・金山五輪塔群について」は『来待ストーン研究』5に掲載したものを再録したものです。



現在の豊龍寺



金山五輪塔群 1号石塔と基壇



1号石塔  
(北側より、左奥は2号石塔)



2号石塔  
(東側より、左端は火輪)



1号石塔 (東側より)



2号石塔  
(南側より、  
右奥は1号石塔)



2号石塔 (東側より)



2号石塔 (北側より)

宍道町ふるさと文庫21

**戦国武将宍道氏とその居城**

2005年3月10日 発行

編 著 井上寛司、山根正朋、西尾克己、稲田 信

発 行 宍道町21世紀プラン実行委員会  
八東郡宍道町大字昭和1番地

印 刷 柏木印刷株式会社  
松江市国屋町452-2



金山（坂口）要害山城俯瞰